

猫 蓑 通 信

第 85号

平成 23年
(2011年)

10月 15日発行
(年 4回発行)



連句とカタカナことば

青木秀樹

もともと日本人にはことばはあったが文字は無かった。今から千数百年前に中国から漢字がもたらされた。漢字にはそれぞれ意味があるが、日本ではその音だけを用いて「古事記」、「日本書紀」、「万葉集」などが編纂された。その後、漢字の崩し字からひらがなが、漢字の一部分からカタカナが作られて今日に及んでいる。

大量の外国語が日本に入ってきた明治期には、欧米に追いつけという国策により、それまで日本に無かった概念や事物は漢字の意味を組み合わせて新しいことばを造語して日本語化した。さらに昭和二十年の終戦後、欧米の文化がことばとともに流入したが、日本に無かった概念、思想、事物などは、日本人に発音しやすいうように原語を変形してカタカナ表示することが多かった。当時、文部省が漢字の使用制限をし、将来ひらがなやローマ字などの表音文字で日本語を表すように決めたことが時代背景にあった。外国のことばを受け入れることは外国の文化を受け入れることであり、その来歴などにも

留意することが必要になる。

「猫蓑通信」第四十二号に野村牛耳氏と東明雅先生との両吟歌仙「傘齡の春」(昭和四十六年首尾)が掲載されている。牛耳氏八十歳、明雅先生五十七歳の時の作品である。その裏十二句を次に掲げる。

混血児の母なる国へ戻る日に

ダイヤの光り指に眩しく

三方を鏡のベッドしらしらし

2DKもマンシヨンのうち

帰り花子ら健かな寺の庭

石焼き芋屋のおいて行く月

リンチには指を詰めるということも

気圧の谷の不意に移動し

ガリレオのまわる地球は今になお

コンピュータの語る未来図

ノッカーに応えのありし海棠花

文豪住めり囀りの奥

この作品の自註の中で明雅先生は「ウラ十二行のうち七行にカタカナが入っている。現在になつては気になるが、当時は気にしなかった」

●目次●

第二十一回猫蓑同人会総会作品 歌仙八巻

第百十八回猫蓑会例会作品 歌仙八巻

転じている、いない 東明雅

マンネリを断つには 東明雅

歌仙宇宙を飛ばす

事務局だより

2 6 10 10 11 12

と記しておられる。どうして気になるようになったかを先生にお伺いしたところ、おおむね以下のような回答があった。

この作品が巻かれた当時、連句復興に燃えていた明雅先生は「新しい連句」を作ろうと新しさをカタカナことばに求めたが、そのうちにカタカナことばを使うだけでは新しい連句にならないこと、カタカナことばで「俗語を正す」との困難さに気づいた。むしろ外来語のもつ文化や来歴の打越や懐紙面の軽さが気になるようになったとのことであつた。

カタカナことばが多用されている現代において、それが漢字やひらがなことばと同じ古くからある日本語と思っている方も多し。ことばの持つ文化的な側面を含めて、カタカナことばを詩的精神で高めているという確信があれば、カタカナことばを多用しても構わないが、深く考えずにただカタカナことばを用いるのであれば、作品に変化をもたらすためにカタカナの打越を避ける方が無難である。

1・熊野の座

歌仙「水の香の」 副島久美子 捌

水の香の湿りてをりぬ鳩浮巢 久美子
 手入れされたる苑の楊梅 醉山
 マイカーを大きワゴンに買換へて 恭子
 ゴルフクラブの自慢あれこれ 冬乃
 飾り棚泥人形に月の影 敦子
 ほぼつき貫ひ走り去る姉 恭
 諸霊祭一斉にみなかうべ垂れ 乃
 セーヌ河畔に甘きヴィオロン 山
 あのひとを港港で探す旅 恭
 介抱されていい仲となり 山
 警報機ランプ点滅したままに 恭
 非常線張る月凍つる路地 乃
 年の暮笛や太鼓のちんどん屋 敦
 辞めると言つて総理居座る 山
 配当が来たよと孫を呼び集め 乃
 酒蔵改装イタリアンカフェ 敦
 過疎の村往診にゆく花の屋 山
 山はかすみ野にはそよ風 乃
 ナオ 春日傘芦丈の句碑をさすりをり 恭
 信玄堤の効能を説く 乃
 鉄砲の火の元濡らすこぬか雨 恭
 天狗がひよいと現れる森 未悠
 地デジ化へテレビ放映変ります 悠

朝顔市で藍色を買い 敦
 まつしぐら車椅子駆るヘルメット 乃
 ハニートラップ機密漏らせり 悠
 凡庸の夫が隠した鍵の束 恭
 太った犬に派手な服着せ 山
 月円か興に乗りあるチエスゲーム 悠
 被災地応援西瓜頬張る 敦
 ナウ さはやかに呼込みの声国技館 山
 昔の夢を語る親方 恭
 宇宙船長期滞在骨細り 悠
 地球いつまで青くあれかし 乃
 静かにも花散る弥勒菩薩像 久
 かげろふ揺れて昇る階 悠

2・羽衣の座
歌仙「先師の軸」

東郁子 捌

夏館先師の軸に目見えけり 郁子
 いづくも今を盛る紫陽花 千町
 エコカーの技術開発競ふらん 佳之子
 腰のポケット捜すクリップ 雅子
 名峰の月を仰ぎて山歩き 豊美
 残る蛭がとまる岩の上 佳
 盆踊賑はひ近く聞えきて 豊
 好きな彼女は君の部下なり 町
 焦がれぬし想ひは告げず転職す 佳

アラビア半島紺碧の海 雅
 礼拝のモスクに人の集ふらん 豊
 鷹匠の手に寒月の鷹 雅
 初雪の吸はるるごとく石に消え 町
 漫画で読破源氏全巻 佳
 朗々と老の吟詠響きをり 町
 足を揃へて正座する犬 全
 咲き満ちし花の枝垂るる野立席 佳
 笑まふ友どち笑ふ山々 雅
 ナオ 釣人をそつと覗ける望潮 豊
 福島今はフクシマとなり 雅
 罹災地の慰問に手品習得し 佳
 新聞切つて万札の束 雅
 新間切つて万札の束 雅
 どんと鳴り鍵屋玉屋の声あがる 町
 吾妻駒形くぐる遊船 佳
 上人にうなじ細しと抱かれて 全
 恋懺悔する少々の嘘 町
 退職後田舎に建てるログハウス 雅
 露天風呂には猿も時々 豊
 月の出に鼓の朱房捌く人 町
 栗の御強を皆にふるまひ 雅
 ナウ ふつつつと蔵につぶやく濁酒 全
 子の本棚にフィギュアいろいろ 佳
 腰痛も頭痛も治す名医あて 郁
 夢に候老いて候 町
 久々に帰る故郷花万朶 郁
 田打の人と交す挨拶 豊

連衆 原田千町 染谷佳之子 武井雅子
 高橋豊美

5・玉葛の座

歌仙「陸奥浄め」 林 鐵男 捌

さみだれや陸奥浄めたまへかし 鐵男
 夢の跡には茂る夏草 千恵子
 晩学の辞書買ふ店の賑はひて 路子
 看板犬にちよっかいを出す 啓子
 立のぼる莩の煙に月はむせ 實
 辻薬師弾く弦の冷やか 啓
 初獵のジビエに打った舌鼓 千
 注ぐワインに籠る真心 路
 この老舗一緒に継いでくれないか 千
 山の宿りのせせらぎを聞き 實
 風評に負けじと励むキャンペーン 啓
 うそか本当かボンと百億 路
 御遷宮着々すすむ寒の月 路
 天鈿女命の踏み鳴らす音 路
 界限に手塚漫画のよすがあり 千
 ゆるんだ眼鏡きつちりとかけ 實
 花を賞で花降る里を徐行せん 同
 子のリフティング続く春昼 千
 ナオ 残る鴨ひたすら長き羽づくろひ 路
 待合室にあくび伝染 啓
 AKB雑誌にならぶ同じ顔 千
 歩行者天国恋を探しに 實
 落し文口説き文句のコレクション 路

桶に山女魚の斑のあざやか 啓
 こまくさの咲く頃ならん八ヶ岳 路
 地図にルートをごまごまと書き 男
 モンハンといふバーチャルに遊んでる 千
 無住の寺に秘仏あるてふ 啓
 嘆きつつ有髪の尼の仰ぐ月 路
 次の配役決める地芝居 千
 ナウそぞろ寒喉にポリープみつかって 同

とつときの酒このときと飲み 實
 祖父の席紙飛行機が飛んでくる 啓
 通販広告丸つける主婦 千
 さまざまの思ひを花にダムの村 男
 川の底には蝨の道あり 啓

連衆 鈴木千恵子 倉本路子 小池啓子
 梅田實

6・杜若の座

歌仙「都バス道」 横井士郎 捌

街路樹に蟻螂生る都バス道 士郎
 人それぞれのパラソルの柄 忠史
 座談会終る頃には打ちとけて あや
 酸味の利いた珈琲が好き 文子
 月昇り影絵のやうに浮ぶ雲 洋子
 遠く聞える唐臼の音 史
 軽々と葭戸を蔵ふ若い者 や
 メールアドレス教へ合ふ仲 洋
 抱きしめて背のほくろをなぜか押す や

瞳ぼつちりちわわ甘噛み 文
 二階から六三四の塔をながめをり 史
 節電対策だるまストーブ 全
 イヨマンテ祈るアイヌへ淡き月 や
 彫刻刀を鋭角に研ぐ 洋
 厨房に未来夢みて白き帽 文
 こだわり多きグルメ広重 洋
 花筏風に任せて右左 史
 うらの午後は砂遊びなど や
 ナオ イースター卵いろいろ染めわけて 洋
 スニーカー旅カナダ横断 文
 急発進火の無い所煙立ち 史
 資質問はるる時の宰相 文
 痲性も親譲りなり書を曝す 全
 ビキニ干すのはいつも室内 や
 不運にもプレスリー似の奴に遭ひ 洋
 裁判員は恋を酌量 史
 まっすぐに歩く先には高い山 や
 同人会費安いほどよい 全
 金環食月の形は黒々と 文
 大地の揺れに目覚めうそ寒 士
 ナウ 鴉の巣を係はそつとのぞき込み 史
 フィギュア蒐集兄さんの趣味 文
 ひたひたとアキバ文化は染み渡り 洋
 少し湯量の減りし源泉 や
 酔眼の視野いっぱい花爛漫 士
 蔓の彼方望む初虹 文

連衆 根津忠史 中林あや 橘文子
 大島洋子

7・鉢木の座

歌仙「気がつけば」

佐々木有子 捌

気がつけば母の口調や辣蕪剥く 有子
 五月雨を聞くキツチンの窓 アンズ
 フリスビーチャンピオン犬キヤッチして 遊民
 褒めてもらふはみんな大好き 常義
 帰り道足並揃ふ良夜なり 淳子
 指まつすぐに流れ星さす 義
 青虫の神話のやうな変身譚 ア
 袋の中味誰も知らない 淳
 こつそりと渡せし文は読まれしや 義
 パーテンダーにひとつウインク ア
 暖簾はねいつものカレーと定食屋 淳
 しゃんしゃんしゃんと熊手買ひをり 民
 月凍つる北国街道十屯車 義
 FM放送けふも洗刺 民
 藍釀す自作工房立ち上げて 同
 器用貧乏地で行った人 淳
 トランプの独り占ひ花を友 ア
 ゆつたり時の過ぎてうららかに 淳
 ナオ 山裾は霜の別れの土の色 義
 牧水歌集いつも鞆に 民
 薙刀の免許皆伝家刀自 ア
 酔うて乱れず膝も崩さず 淳
 すきま風そこにあるのはわかつてる ア

平成二十三年六月十九日
新宿ワシントンホテル 新館

色香にじむは四十過ぎから
焦がされて焦がれてをりぬ恋童

烏賊釣舟の沖に連なり

がんばって見事復活フラダンス

節電マンション川の字に寝る

それぞれ国のことばで賞づる月

鉢巻しかとかつぐ万灯

ナウもてなしは松茸尽し時絵膳

行方の知れぬ猫を探しに

校舎裏想ひ出ほろり湧き出して

深く埋めたるタイムカプセル

哲学の道に花花花の降る

電動自転車やはらかな風

連衆 松島アンズ 内田遊民 生田日常義

上月淳子

8・祇王の座

歌仙「梅雨のリズム」

間瀬美美 捌

庭石を叩いて梅雨のリズムかな 美美
 蟻螂の子の湧ける葉の裏 孝子
 絵日記の白き頁を前にして 了斎
 とりあへず剥くキャンデーの紙 要子
 満月の沖過り行く旅客船 明子
 鳩吹く人のひよろ長き影 斎
 葉掘る時をり腰をのぼしつ 同
 金の話と恋の噂と 孝
 賑やかに派閥領袖スキヤンダル 同

パオをたたんで羊引き連れ
丘陵の彼方に眠る雪の山

聖夜の月に満たす葡萄酒

兄ちゃんは気ままぐらしのフリーター

手先器用に直す靴底

贅曲がりくねって浜に出る

瓦礫に生きて飼ひ猫の鳴く

住職は今年の花に目を細め

風やはらかに絵蠟燭売る

ナオ 薩摩には南蛮風の唸る空

木刀担ぎ走る山道

血糖値高い血筋を受け継いで

かっと燃えてはさつと捨てられ

くしゃくしゃのシートに残る夢の跡

時鳥啼く幽霊の城

溶かされて氷母は紅いつゆ

運河の岸に舫ふ明け暮れ

父さんの柩に入れる写真集

煙が雲に変わる中空

安達太良の稜線をいま離れ月

鯛三尾を手開きにして

ナウ 菊摘めば千草の筋の乱れつつ

置屋の電話鳴りも止まざる

予定表埋める中に横文字も

郷土を背負ふ春の選抜

古き良き時代を経たる花吹雪

ひとり残りに漕げるふらここ

連衆 坂本孝子 鈴木了斎 山本要子
野口明子

1・夏衣の座

歌仙「北斎の」 原田千町 捌

北斎の波とくだける夏の浜 千町
 土用東風なる丘の四阿 わこ
 子供らとフルーツポンチ作りあて 未悠
 箱は何でもとつておく癖 恭子
 月上る鎮もれるまま囲碁の席 末季
 おかめ蟋蟀ひよいと出てくる 悠
 君好み後の衿を染めてをり わ
 自由自在に愛の言葉 恭
 水の中掴まうとして掴めない 季
 アルミの蓋の酒は大関 わ
 クレーン車スカイツリーを組み立てて 悠
 狐狸と見上げてる月 恭
 寒稽古はやり唄には背を向ける わ
 頑固一徹頭から湯気 季
 老執事すつきり着こなすユニフォーム 悠
 アロマの部屋は白とブルーで 恭
 どんなこと有つても花はきつと咲く 同
 壬生念仏のおごそかな声 わ
 ナオ 山末の淡雪とけて結仲間 季
 メールアドレスみんな覚えた 悠
 スムーズに事が運んで上機嫌 季
 床下の壺ざくざくと金 わ
 すててこのご主人様の思ひ人 季

ヨットの中はハーレムのやう
 習ひたて使つてみたいアラビア語
 工事現場に事故の発生 季
 陰陽師吉凶占ふ暮近く わ
 巨大企業の減らすブーナス 悠
 十三夜笑ふが如き兵馬備 わ
 鴟の早贄やつとみつけた 同
 ナウ 美術展知らない街はナビで行く 恭
 医者の勧めはただ歩くこと 同
 からくりの時計狂はず二百年 悠
 初代の写真セピア色なる 季
 パーティーの知らせに花も盛りとか 町
 琴の音ゆるく聞きてうららか 悠

2・編笠の座

歌仙「凱旋の」 本屋良子 捌

ヨットの中はハーレムのやう
 習ひたて使つてみたいアラビア語
 工事現場に事故の発生 季
 陰陽師吉凶占ふ暮近く わ
 巨大企業の減らすブーナス 悠
 十三夜笑ふが如き兵馬備 わ
 鴟の早贄やつとみつけた 同
 ナウ 美術展知らない街はナビで行く 恭
 医者の勧めはただ歩くこと 同
 からくりの時計狂はず二百年 悠
 初代の写真セピア色なる 季
 パーティーの知らせに花も盛りとか 町
 琴の音ゆるく聞きてうららか 悠

連衆 横山わこ 棚町未悠 式田恭子
 伴野末季

凱旋のなでしこJAPAN夏の雲 良子
 乾ききつたる列島に喜雨 了斎
 天金もありて曝書を楽しみに 昭
 眼鏡を拭ふ小さき不織布 有子
 公苑の広場邯鄲しきり鳴く 郁子
 月に乱るる草々の影 斎
 火祭の男鉢巻勇み立ち 郁
 八つに割れる腹筋を見せ 有
 わが胸に恋を奏づる弦楽器 斎

あなた私の永遠のロミオよ
 イギリスの田園に立つアンの家
 卓上に置く青銅の像 斎
 山頂の樹氷見あぐる三日の月 昭
 遠く近くに狼の声 郁
 兄妹道に迷はば野宿せむ 有
 隠しておいた酒がなくなり 同
 白くべた灰持つてこい花の庭 斎
 絶ゆることなき宮の囀 昭
 ナオ みんな似る蚕飼の村の子供たち 斎
 プライド高き落人の裔 有
 偏見を抱けばますます穴に入り 良
 化粧の時間たつぷりと取る 有
 華甲らの今なほ続くクラス会 昭
 我が初体験あつげなく済み 斎
 歳上の裸まふしき島娘 同
 牛車で巡る沖繩の旅 郁
 一ドルが三六〇円の頃 有
 制服廃止都電廃線 斎
 ひんがしに燦と今宵の月を浴び 郁
 いつも静かに夜なべする父 有
 ナウ 蓑虫の辺りうかがふ首出して 昭
 唐草模様の風呂敷を掲げ 有
 覚えたてマジック披露ごちなく 昭
 裏の小川で釣の連中 郁
 花吹雪観音さまの遊び足 良
 団扇太鼓の響きのどちらか 執筆

連衆 鈴木了斎 松原昭 佐々木有子

東 郁子

あなた私の永遠のロミオよ
 イギリスの田園に立つアンの家
 卓上に置く青銅の像 斎
 山頂の樹氷見あぐる三日の月 昭
 遠く近くに狼の声 郁
 兄妹道に迷はば野宿せむ 有
 隠しておいた酒がなくなり 同
 白くべた灰持つてこい花の庭 斎
 絶ゆることなき宮の囀 昭
 ナオ みんな似る蚕飼の村の子供たち 斎
 プライド高き落人の裔 有
 偏見を抱けばますます穴に入り 良
 化粧の時間たつぷりと取る 有
 華甲らの今なほ続くクラス会 昭
 我が初体験あつげなく済み 斎
 歳上の裸まふしき島娘 同
 牛車で巡る沖繩の旅 郁
 一ドルが三六〇円の頃 有
 制服廃止都電廃線 斎
 ひんがしに燦と今宵の月を浴び 郁
 いつも静かに夜なべする父 有
 ナウ 蓑虫の辺りうかがふ首出して 昭
 唐草模様の風呂敷を掲げ 有
 覚えたてマジック披露ごちなく 昭
 裏の小川で釣の連中 郁
 花吹雪観音さまの遊び足 良
 団扇太鼓の響きのどちらか 執筆

3・青簾の座

歌仙「なでしこ咲く」

青木泉水 捌

みちのくになでしこ咲かす花火かな 泉水

ビールの泡を飛ばす乾杯 雅子

漁師たち重たき網を巻き上げて 秀樹

報告日誌何事も無し 泉

高層の窓に遍く月の光ケ 雅

林檎の皮を薄く剥く青 樹

似た顔に出会ふ案山子のコンクール 泉

嫁に来てよと母が奔走 雅

だめならばやり直しきくお年頃 樹

データはみんなパソコンに入れ 泉

白亜紀のティラノサウルスイグアノドン 雅

きもかはいいと売れる芸人 樹

月受けて蒟蒻掘りに行く爺さん 泉

木菟の声森の奥より 雅

山上に鎮座まします海の神 樹

ローカル線の歌碑巡る旅 泉

西陣の機で織り出す黄水仙 雅

二條下ると道のかげろふ 樹

ナオ 佐保姫にけふの運勢訊くならん 泉

魁皇つひに引退の刻 雅

百歳の詩人はいつも微笑みて 樹

戦話も思ひ出となる 泉

節電でシンプルライフ実践し 雅

平成二十三年七月二十日
江東区芭蕉記念館

ひとつ布団で足りる同棲
葱汗にぶち込んでやるふたごころ

彌勒菩薩のたをやかな指 泉

手つかずのままの古墳を照らす月 樹

新走とてくと味はふ 泉

かなかなのなかなか鳴かぬ宿に来て 雅

うり坊の出る狭き裏庭 樹

ナウ バンダナをきりりと締めて太極拳 泉

ぎっくり腰も息災のうち 雅

元校長記憶よすぎる長話 樹

バロック音楽流す頃合 泉

花吹雪園遊会のたけなはに 雅

浜御殿越え消ゆる蝶々 樹

連衆 武井雅子 青木秀樹

4・噴水の座

歌仙「なでしこは」

永田吉文 捌

なでしこは強き女の名なるべし 吉文

心ひとつにする虹の橋 遊民

ピッコロの調べ転がす水辺にて 孝子

スパゲッティを運ぶ蝶タイ 志世子

蔓のはふ小窓に月は青く映え 鐵男

新刊を買ふ立秋の街 孝

ウ クラス会べい独楽談義切りもなく 民

男泣きしたスーちゃん死よ 孝

三代目無口なれども多情なる 世

知らぬ間に浮気ばればれ
笠地蔵深雪の中に笑まふ辻

長い氷柱の垂れる牛小屋 孝

水晶のロマの占ひ魔性めき 男

かつと血潮のたぎる遺伝子 孝

将軍の畜で錠前作りなり 民

旧きエアコン時々効き 世

花おぼる月も臆でご縁日 男

お蔭参に酔へるちんぴら 世

ナオ 手づくりの土産に貰ふ鱈田麩 孝

企業誘致に回るマンション 民

被災地にブルドーザーの音響き 世

涙こぼさず仰ぐ星空 吉

湖畔には我が快心の裸婦の像 男

これは易さよネグリジェの翅 孝

後宮の孔雀の嫉妬むしる薔薇 同

徹宗は筆を置いて振り向く 男

鑑定のプロにすべてを見抜かれて 民

また漂泊の旅に出るなり 孝

月今宵思ひ浮かべる父母の顔 世

障子にゆれるあはれ糞虫 同

ナウ 賑はへる芝神明の祭にて 民

異国言葉の乱れ飛びゆく 世

夢抱きホームステイの小学生 吉

庭の姫虻ふつと湧いたか 民

門川に掬ひてあきぬ花筏 吉

風を確かめゆく青き畦 男

連衆 内田遊民 坂本孝子 秋山志世子

林 鐵男

5・絵扇の座

歌仙「海の黙」 山口美恵 捌

夏深し祈りのみ込む海の黙 美恵

ビーチパラソル残る一本 士郎

ティーパーティーストローの先をりまげて 路子

呼吸の合はぬ連弾の曲 要子

月明り高層街を濡らしをり 芙美

側溝の縁伸びる芋の葉 芙美

ウ 利酒に得意料理をつぎつぎと 要

ちよいと摘んでみたい年頃 士

呉服橋わたる旦那はイケメンで 芙

塀にどうやらのぞき穴あり 路

やせつばち看板猫はのらくる似 要

兵隊ごっこ知らぬ子供ら 路

旅人のよぎる原野の寒き月 要

影もはかなく雪螢舞ひ 芙

先づ誇るコンピュータ「京」世界一 士

飛行機買ってめざすヒマラヤ 同

存分にひとりの花を浴びてをり 路

殿様蛙おほあくびする 要

ナオ 荷を解けばごろりと出でし晚白柚 路

左ぎつちよの怖い包丁 恵

強風に龍馬の像を避難させ 要

どだんどんと寄せる大波 路

水母でもノーベル賞の役に立ち 士

見合写真を添付転送

恋突然止めて止まらぬこの炎 路

夜叉も天使も棲んでをります 芙

極楽へひ弱な冬の蜘蛛の糸 路

ぐうちよきばあで決めてちやうだい 要

新月を探すつもりの別れ道 士

梔子の実で染めたスカーフ 芙

ナウ 晋平の五線譜の墓虫しぐれ 路

古書肆の棚に埋まる家系図 恵

わが暮しなほおもしろと友卒寿 路

一ふくさ捌きをきつちりと決め 要

花の蔭いちま人形梳る 恵

ツーリングコース風光る中 芙

連衆 横井士郎 倉本路子 山本要子

間瀬芙美

6・風鈴の座

歌仙「でで虫や」 鈴木千恵子 捌

でで虫やかな文字のごと銀の痕 千恵子

水無月尽の濡縁の上 則子

中世史探訪ツアー盛況に 暁巳

時差惚け止めに貰ふ仁丹 久美子

十五夜を横目で睨む猫もぬて 鄭和

長靴履いて葦刈をする 鄭和

アンデスの野は未枯れてケーナ泣き 和

まだ幼顔ふたり早婚 久

とりあへず硝子の指輪で誓ひます 巳

産めよ殖やせよ年金の為

東京でオリピックの阿呆らしき 巳

私の故郷まだ雪の中 則

寒林の枝の彼方の月愛でて 巳

韓流スター今が全盛 和

ちんどん屋肩を落として休む軒 巳

ちらしで上手く作るごみ入れ 久

鈍行で降り自在花の旅 同

栄螺の匂ふ海沿ひの径 久

ナオ 春深し白鳳仏は玻璃の内 千

八一をまねて鬨達の筆 和

尻尾振りなついてくれる犬を飼へ 和

揉み手よいしよで生きる人生 巳

名亭の精進料理肅々と 久

ほのかな風に薫る掛香 則

久しぶりあいつの汗を嗅いだ夜 和

胸のさざ波大波となる 久

やな予感処女航海で沈む船 巳

テキーラ飲んで全部忘れた 則

スキップで月と私と弾みをり 同

県境の山渡る雁 巳

ナウ 烏瓜喰はれた後のからっばに 則

為すべきことはもうないと婆 久

勝ち抜いてなでしこジャンおめでたう 同

両手いっぱい提げのお土産 和

拝領の染付に散る花ふぶき 千

深き底も暮れかぬ頃 執筆

連衆 伊藤則子 島村暁巳 副島久美子

高山鄭和

7・掛香の座

歌仙「江戸くぐり」

中林あや 捌

江戸しぐさ似合ふ暮しや晩夏光

あや

日傘傾げてすれ違ふ路地

文字

簡単なパソコン講座満席に

達子

眼鏡かけたりすぐ外したり

敦子

順番のやうやつときた理髪店

常義

サッカー談義沸騰の月

文

ウ はしご車もサイレン鳴らし出動す

敦

びくり片耳脇で寝る猫

義

気づかずに媚態をみせる十五歳

文

個人教授は恋のハウツー

や

上水の水ほそぼそと流れをり

義

草の実払ふ長い靴下

同

居待月もうよからうと缶の酒

敦

神明祭ピルのはさまに

文

フラダンス名取りになつて町起し

敦

静かな努力人を動かす

義

登るほど久遠の花の咲き満ちて

達

蝶々の見るあどけない夢

文

ナオ 売立ての古書肆賑はふ弥生尽

義

黒岩涙香僕の曾祖父

や

シチリアに海鮮料理堪能し

文

のど震はせて歌ふカナリア

同

祈祷師は手品師のごと雨を乞ふ

敦

借用証には惜しい水茎

崖下の家に通へば立つ噂

着膨れキッスもどかしいこと

ぼろ市の夫婦茶碗はばらばらに

巨匠の絵画手放すと決め

托鉢僧影長く伸び十三夜

木の実ころがる分校の庭

ナウ 鬼の子の蓑引つかぶりどこへ行く

ハローワークは意外親切

癒しにはヘルパーさんの良き笑顔

味噌や醤油も百均で買ひ

なほ続く旅の幸せ花の宿

小筐の中にきしゃごおはじき

連衆 橋 文字 篠原達子 武井敦子

生田日常義

8・箱庭の座

歌仙「登橋礼」

上月淳子 捌

胸に帽登橋礼や夏深し

淳子

塑像さながら潮焼の貌

央子

透明なガラス細工を求め来て

健

テールブルクロスさつぱりと替へ

健

月を待ち科学談義もたけなはに

健

母の自慢の初茸の飯

健

運動会子らの歓声ほとばしり

淳

掛違ひたる愛の始まる

健

髪長き乙女なりしが人の妻

淳

美少年てふ銘柄のよき

イレブンの笑みのこぼるる帰国便

大漁祝ふ寒鱈の月

落したきものも多くて厄落

個人情報名簿作れず

知事選の期日前投票列をなし

キリマンジャロをつひに征服

鼓笛隊賑やかに行く花の街

労働祭はちよつと下火に

ナオ 赤貝をさばく包丁あざやかに

戸口に揺れる暖簾ぐぐりて

難聴かはた空耳か立ちすくむ

風が起れば光る蜘蛛の囀

捕物のリハーサルする舞台裏

アラエイティに又も隠し子

初恋のひとの名今も忘れず

いたるところに青山と夢

冬館座敷わらしの後影

昔話を読み聞かせする

カルデラ湖浮べる月を眺めゐて

うそ寒の猫ちびと名を付け

ナウ 列車待つ男に木の実降りかかり

当り馬券を拾ふ幸運

しみじみと般若心経草の戸に

わたしの口調そっくりな孫

初花の明日あれかしみちのくに

ふらここを漕ぐ天にとどけと

健

健

健

健

健

健

健

健

健

健

健

健

健

健

健

健

健

健

健

健

健

健

健

健

健

健

健

平成二十三年七月二十日

江東区芭蕉記念館

転じている、くない

東明雅

平成六（一九九四）年四月十五日発行

『猫養通信』第十五号「質問コーナー」より転載

【Q】 連句は転じがなければならぬと教わりますが、実際の付け合いの中で、転じている、いないの判断には主観的な面もあるように思えます。どのような点に工夫すればよく転じられるかお教えください。

（村田富美）

【A】 「歌仙は三十六歩、一步も後に帰る心なし」（三冊子）と芭蕉がさとしたように、連句（俳諧）では、一卷を通して、後に戻らず進展するのが基本ですが、具体的に言うと、まず、付句が打越に戻らぬよう心がけねばなりません。打越に戻るのを「観音開き」と言って最も嫌います。従つてこの三句（打越・前句・付句）の転じに注意することが肝要であります。

この三句の転じの方法は、昔からいろいろと考えられて来ましたが、蕉門の立花北枝が三年間工夫考案して芭蕉にも見せたという「付方自他伝」の法が、一番分かりやすいと思います。

即ち、人情の句を自の句・他の句とに分け、人情なしの句は場の句として、1自場他、2他場自、3場自自・場自他、4場他他・場他自、5自自他、6自他他、7他他自、8他他ノアシ

ライ自、9自他半场他と九つの組み合わせに取めて付けて行く方法で、これによれば、自然に打越の難を避けることができ、三句の転じが果せるのです。

しかしながら、その一句が自か他か、あるいは人情の句か場の句かの判断も難しい場合があります、あるいは一句の中に自と他を含んでいる自他半もあるから、初心の方にはちよつと面倒かも知れません。

さらに、もう一つ、たとえば

- | | | |
|----|---------------|---|
| 1 | 硯に向かひすだれ揚げつゝ、 | 自 |
| 2 | 梨の花咲き揃うたる夕小雨 | 場 |
| 3 | 誰におどろく女一むれ | 他 |
| 3' | 誰におどろく絵描き一人 | 他 |

右の場合、3は全く転じ得ているが、もし、3'を付けたならば、同じ他の句であっても打越の1の人物と同じ人物、あるいは同系統の人物

マンネリを断つには

東明雅

平成九（一九九七）年十月十五日発行

『猫養通信』第二十九号「質問コーナー」より転載

【Q】 連句は日本の優れた文芸であると感じてはいるつもりでも、実作になってくると色々なマンネリ化が気になります。どのような工夫をしたらよいでしょうか。

を想像させる為、三句の転じにはなりません。

同じように、たとえば

- | | | |
|----|----------------|--------|
| 1 | 鯨突一二の銚をあらそひて | 他 |
| 2 | 無分別なる兒に雪降る | 他ノアシライ |
| 3 | あのやうな小庵かなと思ふまで | 自 |
| 3' | 辛口をもう小半と思ふまで | 自 |

これも3は全く別の人物（出家、旅の僧）となつて1から転じ得ているが、3'は同じ自の句でも1と同じ漁師めいた人物である故に転じていないのです。

このように、ただ自他をふりわけただけでなく、その内容にもよく注意しないと転じない場合がありますので御注意下さい。

転じているいないの判断に主観的な面もあると言われるのは、自・他・場の判定、さらにその内容の表現と理解の適否によるものであろうと存じます。

【A】 連句でマンネリを避けるには、いろいろな工夫、方法があるでしょうが、「不易流行」を自分の俳諧の根本理念とし、一生を新風の追求に費した芭蕉の芸術や生活は、随分参考になるのではないのでしょうか。

この芭蕉の展開については七変説・五変説などもありますが、現在通説となつている三変説によれば、まず第一は、貞享元年（一六八四）の「冬の日」調の確立であります。延宝六年

(二六七八)、江戸で俳諧の宗匠をしていた芭蕉は、言語遊戯に終始していた談林調を脱却すべく、居を深川の草庵に移し、簡素な生活の中に、莊子を読み、仏頂和尚について禅を学び、まず、自分を革新することによって、作風を変えようとなりました。これが貞享元年(一六八四)の「野ざらし紀行」の旅の途中、名古屋の連衆と巻いた「冬の日」の五歌仙によって、脱俗的・風狂的な世界が確立されたのであります。

その後、元禄二年(一六八九)の半年に及ぶ「おくの細道」の旅で、彼は「不易流行」を開眼、従来の古典的世界と眼前の日常的世界を調和させ、花実兼備の「猿蓑」の優雅な世界を創り出したのであります。

歌仙宇宙を飛ぶ

International Space Station



日本人宇宙飛行士の古川聡さんが今年六月四日以来滞在しておられる国際宇宙ステーション(ISS)の日本実験棟「きぼう」には、二巻の歌仙を納めたDVDが収められ、永久保存されている。これは財団法人日本宇宙フォーラムが企画した「地球人の心」プロジェクト

さらに彼はこの完成された「猿蓑」の世界に満足せず、さらに新しい境地を目指す事になりますが、これは庶民の生活を軽妙な観察で描き出し、そこにかすかな「しおり」を求める「かみ」の風で、俗語の自由な使用もその特色の一つであります。もともと「かみ」は「おくの細道」の旅の途中、「古び」の自覚から思いついたものと言われていますが、元禄七年(一六九四)の「炭俵」、その「梅が香」の巻、「秋の空」の巻などにその特色を見る事が出来ます。マンネリを断つ事は、過去の自分を否定し、新しく生まれ変わる事を意味します。それだけに並々ならぬ努力と痛みが伴なう事は当然でしょう。そのことは和歌・詩・俳句その他文芸一般

クトの一環で、この二巻の歌仙は、長野県小布施町の「まなとも連句会」(『猫蓑通信』第八十号参照)のご連衆が巻いたもの。収録された歌仙は、『猫蓑通信』第八十号に掲載された「始業式」の巻と、もう一卷「白粉花」の巻(ともに山寺たつみ捌)。猫蓑会員の捌による歌仙が宇宙を回り続けていると考えると楽しい。

日本時間七月九日に打ち上げられ、アメリカ東部時間七月二十一日にフロリダ州のケネディ宇宙センターに帰還した最後のスペースシャトル「アトランティス」によって、このDVDはISSへ運ばれた。

「まなとも連句会」の歌仙がこのDVDに収められたのは、人と人のつながりの結果だ。

に共通する事でしょうが、俳諧はそれら個の文芸ではなしに、連衆と共同製作による文芸でありますから、自分独りが生まれ変わっても、十分とは言えません。

その点芭蕉は非情と思える程の処置をしております。「冬の日」・「猿蓑」そして「炭俵」、そこに登場する連衆は殆どタブラ・ラ・ラと行かれません。これは旧い弟子共は、次々に変化して行く新しい芭蕉の俳諧についていけなかったというのが実情でしょうが、新しい俳諧を作るには、その一座もマンネリ化しては駄目だという事なのでしょう。

小布施町の名品として知られる「世界一のパン・チエルシーバズ」の生みの親、岩崎小弥太氏は、「まなとも連句会」のメンバーとして『猫蓑通信』第八十号の記事にも登場しておられるが、「新生逢人」という俳号通りの豊かな人的交流をお持ちの方だ。

東京藝術大学教授を退官後、小布施町に彫刻ギャラリーを開かれた彫刻家の米林雄一氏(同大名誉教授)は、これまで同大とAXA宇宙航空研究開発機構との共同研究に携わり、ISS内でのさまざまなアート・プロジェクトを推進してこられた。岩崎氏はこの米林氏とかねてから親交があり、今年七月に建立された岩崎氏の句碑にも米林氏は棹石を提供しておられる。

事務局だより

岩崎氏がこの米林氏を小布施町立図書館「まちとよテラソ」館長の花井裕一郎氏（映像作家）に引き合わせることによって、「財団法人日本宇宙フォーラム」と「テラソ」が結びつけられ、「テラソ」が「地球人の心プロジェクト」に参加することになり、その成果として「テラソ」では今年一月三十日に「宇宙はワクワク！」というイベントが盛大に開催された。

こうした経緯を通じて「まなとも連句会」にDVDに収録する歌仙の提供が求められた。

DVDには歌仙のほか、やはり「テラソ」を介しての俳句や、その他のルートで集められた連詩、児童画なども収録されている。また、東日本大震災で被災した、宮城県女川町立女川第一中学校の生徒作品なども収録されている。

八月には東京の丸の内北口前地下通路（丸の内オアゾと新丸ビルをつなぐ地下通路）で「地球人の心」展が開催され、児童画など、このDVD収録作品のレプリカも展示された。

このDVDへの小布施町の連句・俳句の収録を報道した七月三十日付けの地元紙「須坂新聞」では、別記事で、上述した岩崎小弥太氏の句碑の除幕式（七月十四日開催）についても報道され、岩崎氏を囲んで並ぶ当日の関係者の記念写真が掲載されている。

しかし、まことに残念なことに、このときお元気に出席された岩崎氏は、その約一ヶ月半後の九月六日、かねてご入院中だった同町の新生病院ホスピスにてご逝去された。享年八十八歳とのこと。つつしんでご冥福を祈ります。（編）

●平成二十三年度猫蓑会総会が開催されました

七月二十日（水曜日）、江東区芭蕉記念館にて猫蓑会総会（第百十八回猫蓑会例会）が開催され、議事後、八卓に分れて歌仙を巻きました。作品は今号の6ページ以下に掲載されています。

●芭蕉忌正式俳諧（立礼）の稽古が行われました

生憎の大型台風首都圏直撃の当日となってしまいました。九月二十一日（水曜日）、江東区芭蕉記念館にて、第三十一回俳諧芭蕉忌正式俳諧のための稽古が行われました。来年四月、亀戸天神での藤祭奉納正式俳諧を、本殿の神前にて公開の立礼で興行することが決まったため、それに備えて芭蕉忌正式俳諧も立礼で行うことになり、この稽古が、初めての立礼正式俳諧の作法を検討、確立して行くための第一歩となりました。

●今後の予定

・俳諧芭蕉忌・明雅忌

正式俳諧興行 源心実作

十月十九日（水曜日）

十一月十七時（受付十時半より）

於 江東区芭蕉記念館

・平成二十四年初懷紙

歌仙実作

一月十五日（日曜日）

於 フロラシオン青山

・平成二十四年藤祭俳諧興行

（亀戸天神社開基三百五十年祭）

正式俳諧興行 二十韻実作
四月二十五日頃 於 亀戸天神社

●猫蓑基金にご協力ありがとうございます

・根津美紗様 平成二十三年五月 三千元
・山寺たつみ様 平成二十三年八月 五千元

基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫蓑基金 普通預金 3376045

●作品集・書籍など

・猫蓑作品集第二十一号 七月十五日刊
頒価二千元 お問い合わせは鈴木千恵子まで

●転居

・市野沢弘子 富士見市内転居（電話番号変わらず）

●猫蓑会オフィシャルサイトをご利用下さい

<http://nekominio.coolne.jp/>

サイト内の「書庫」のページで、『猫蓑通信』の全バックナンバー、『季刊連句』全バックナンバーなど、猫蓑会関連資料を閲覧、ダウンロードできます。

季刊 『猫蓑通信』第八十五号

平成二十三年十月十五日発行

猫蓑会刊

発行人 青木秀樹

〒182・0003

東京都調布市若葉町2・21・16

編集人 鈴木了斎

印刷所 印刷クリエイト株式会社